

『漢方の効能について』

私が、小児科と内科医でダンサーであることは皆様よくご存じのことと思います。しかし私には、もう一つの顔がありまして、実は漢方医でもあるのです。東洋医学会会員であり、時々学会発表もしています。

開業後、不定愁訴に悩む思春期の子ども達を見る機会が多くなりました。その子達に漢方薬を使用すると、著効する例があり、その効能に目を見張り、漢方にのめり込んで行きました。



「漢方医学」が、中国の医学と思われている方が多いようですが、実はれっきとした日本の医学なのです。中国が起源で、日本で独自に発展した医学なのです。「漢方医学」という呼び名は、江戸時代中期にオランダから入ってきた医学を「蘭学」と呼び、従来からの日本の医学を「漢方」と呼ぶようになったことから始まりました。

漢方薬は「生薬」と呼ばれる、自然界に存在する植物、動物や鉱物などの薬効となる部分を、複数組み合わせ合わせて構成されています。たとえば、桂枝(けいし)、芍薬(しゃくやく)、大そう(たいそう)、甘草(かんぞう)、生姜(しょうきょう)を組み合わせたもので「桂枝湯」(けいしとう)という漢方薬がつくられています。

漢方医学では、患者さんを心身両面から総合的に捉えて治療するという全人的医療の考え方があり、また人間が本来持っている自然治癒力を高めるという考え方があります。そのため漢方薬は、体質に由来する症状(冷え性、虚弱体質など)や検査に表れない不調(更年期障害の症状など)の治療に効果があります。生薬の組み合わせが変わると、ある生薬の薬効が増強されたり毒性が抑制されたりして、有効性や安全性が大きく変化するのが特徴です。

つまり、漢方薬としての薬効は、個々の生薬の総和ではなく、構成されている生薬の組み合わせによって得られています。

漢方薬と混同されることの多いものの一つに、「民間薬」を挙げることができます。民間薬は、古くから人々の間で言い伝えられ、利用されている薬草などで、千振(せんぶり)やゲンショウコなどがあります。

漢方薬と民間薬はさまざまな点で異なります。多くの民間薬は単一の薬草で構成されています。

現在の医療の場において、漢方薬は主に生薬を煎じた液をフリーズド・ドライさせて得られるエキスを顆粒状にしたエキス製剤が使用されています。「煎じる必要がない」「携帯しやすい」「旅行先でも服用が楽」「保存が容易」など、患者さんにとってのメリットだけでなく、品質が均一な製剤が多くの人に処方されて大量のデータを蓄積することが可能となり、科学的根拠(エビデンス)の解明にもつながっています。

単剤で多彩な効用を持つ漢方薬は現在の高齢化社会におおいに役立っています。